



TITLE:

はじめに

AUTHOR(S):

西岡, 加名恵

CITATION:

西岡, 加名恵. はじめに. 教育方法の探究 2005, 8: i-i

ISSUE DATE:

2005-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190313>

RIGHT:

はじめに

西岡 加名恵

2005年、日本は「戦後」60年を迎える。「戦後」にあえて括弧を付したのは、第二次世界大戦後、既に私たちはいくつもの戦争を経験しているからである。60年前に多くの日本人がたてたはずの「不戦の決意」を、私たちはまだ実現できずにいる。さらに近年、直接的に戦争を体験した世代の声が小さくなるにつれ、大きく時代の空気が変わってきていると感じる。自由と自己責任がセットになって論じられる風潮の中で、虐げられている人々への想像力や共感が、だんだんと弱まっていったのではないだろうか。

教育は、明日の社会を築こうとする営みである。どのような社会を構想するのか、そこで「私」はどう生きていこうとしているのか——教育に携わる人間は、いやがおうでもそれらの問いと向き合わざるをえない。教育方法学は、教育の方法を問う学問ではあるが、すべての方法に何らかの理念が体现されている以上、自らがどのような理念を選ぼうとしているのかの価値判断から自由ではありえない。それが、教育方法学を研究することの苦しみであると同時に醍醐味でもある。

『教育方法の探究』第8号は、例年通り、教育方法学講座に所属する若手研究者たちの多彩な研究成果を収録するものとなった。領域が多岐にわたるとはいえ、一つひとつがより良い未来を求める探究の結晶であることに違いはない。

私自身、母校に帰ってきて1年が過ぎた。文字通り無我夢中の日々の中で、恩師と諸先輩方が培ってこられた研究のエトスを後輩たちに伝えていくべき重責を、怖れとともに感じている。指導して下さった先生方の姿を思い浮かべ、比して自分の非力と未熟さに打ちひしがれる日もある。しかし、研究室にあふれる伸び盛りの学生たち・院生たちのエネルギーには、背中を押されずにいられない。希望を込めて未来を語る勇気をもって、研究に取り組んでいこう—互いに切磋琢磨しながら。